

神棚の御神札をいつころ取り替えるのかということをお悩みの方がいるのかもしれない。初詣の時ではなく年明け前にお札を購入して年内に取り替えるのが通常であるが、年内でも、年末が押し迫った12月29日に取り替えることは「九日飾り」といわれ、「九」が「苦」に通じるとされて忌み嫌われている。また、大晦日の31日に取り替えることは「夜飾り」といわれて同様に忌み嫌われているのである。

さて、私は、毎年11月ころになると伊勢神宮に参拝する。本来であれば12月1日以降に参拝したいところであるが、師走に入るとどうしてもバタバタしがちとなるので、11月中に参拝することが多くなってしまった。外宮から参拝し内宮に回るのが伊勢参りの参拝方法と言われているが、内宮に参拝するときには、宇治橋を渡り、手水舎にて身を清め、さらに五十鈴川御手洗場にて川の流れをゆつくり眺め、その水で手を清めてから瀧祭神にて、住所・氏名を伝えて参拝する。ところが、毎年伊勢神宮を参拝してい

つも感じることであるが、五十鈴川御手洗場から参道を御正殿に向かつて歩いていく参拝者がほとんどなのである。しかし、瀧祭神は、「お取り次ぎさん」とも呼ばれ、神に取り次いでくれる受付の役割を担っていることから、ここをはずして御正殿に向かつていく参拝者は、神からは「名無しの権兵衛」が参拝していることになってしまう。ちなみに、出雲大社の場合には勢溜の鳥居を通ると参道が下り道となるが、まもなく右手奥に祓社があり、ここを最初に参拝することとなるのだが、式年遷宮の際に参拝した時も、最初に祓社を参拝する者は少なかった。

伊勢神宮(内宮)に話を戻すと、御正殿に向かつて砂利道の参道を歩いて行くと少しずつ心静かになっていく。一步一步と砂利を踏みしめる音を聞きながら進んでいく時、あれこれと1年の反省点がたくさん浮き上がってくる。そして、いよいよ、御正殿の石階段を上がっていく。この石階段の幅員は成人が歩くには広くなっていて歩きづらいといつも感じてきたが、実は、この石階段の

幅員は神馬に合わせた幅員であることを知った後は、この石階段を上っていく御馬の姿を想像してゆつくりとあがっていくことにしている。伊勢神宮では外宮でも内宮でも毎月1日、11日、21日と月に3回、神宮とともに神馬が見参される。

ところで、私の自宅と事務所のいずれにも神棚がある。毎朝、それぞれの神棚の神の葉が枯れていないかと確認しながら水を替えるなどして拝礼している。神は季節に変わりなく緑の葉をつけている常緑樹であり、神社でのお祓いや神棚によく使われているが、もともとは、神社に関わりを持つ常緑樹全般のことを「榊」と呼称していたようである。現在では、私も含めて多くの国民が「神」と言ったら、ツバキ科サカキ属の常緑小高木のことを指している。伊勢神宮を参拝するとたくさんの榊が鳥居や玉垣に使われているのが見て取れる。伊勢神宮では、年間2万本ほどの榊が使われているらしい。

昨年に伊勢神宮を参拝してからあつという間に1年が経過してきた

ように思う。毎年毎年、1年が短く感じてきた。時間に追われて慌ただしく1日が過ぎ去っていく。心の中で時間を止めてゆつくりと物事を考えるということも少なくなってきた。神棚に向かい拝礼する時間がどんどんと短くなっていった。神棚に向かつて自分の中から出てくる言葉も、とても表面的な言葉に終始し、そういう自分に不安を感じるようになった。どこへ行ってもどんな時間でも携帯電話からの着信音が聞こえ、メールが送信されてくる。わずかな時間であっても、静寂な中で心を澄まし、言葉にならない言葉がわき上がってくるのを待っている時間はとても愛おしいものである。

いつも感じることはあるが、日々の生活の場とはまったく異なる「異界」ともいえるべき聖なる場所である伊勢神宮、清らかな五十鈴川の水の音、砂利を踏みしめる際に発する連続した音に耳を澄まし、深呼吸しながら御正殿に向かつて歩く時間は、わずかなであつても、私にとつてはとても大切な時間なのである。

律談
法相 R 40

伊勢神宮での静かな時間

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋・日浦法律事務所」代表。